

令和2年12月長浜市教育委員会定例会 会議録

I. 開催事項

1. 開催日時

令和2年12月24日(木) 午後1時30分～午後2時27分

2. 開催場所

教育委員会室(長浜市八幡東町632番地 長浜市役所5階)

3. 出席者

教育長	板山 英信
委員	西橋 義仁(教育長職務代理者)
委員	廣田 光前
委員	美濃部俊裕
委員	宮本 麻里
委員	中村 亜紀

4. 欠席者

なし

5. 出席事務局職員

教育部長	酒井猛文
次長兼教育総務課長事務取扱	鵜飼康治
教育指導課長	伊藤浩行
すこやか教育推進課長	大田久衛
幼児課長	山口百博
教育センター所長	野村幸弘
教育改革推進室副参事	中北隆尚
教育総務課長代理	今井健剛
教育総務課係長	西川洋輔

6. 傍聴者

なし

II. 会議次第

1. 開 会

2. 議 事

日程第1 会議録署名委員指名

日程第2 会議録の承認

日程第3 教育長の報告

日程第4 議案審議

議案第44号 第3期長浜市教育振興基本計画（案）について

日程第5 協議・報告事項

(1) 令和2年長浜市議会12月定例会一般質問答弁要旨について

日程第6 その他

3. 閉会

III. 議事の概要

1. 開会

教育長から開会宣言があった。

2. 会議録署名委員指名

西橋委員、中村委員

3. 会議録の承認

11月定例会

特に指摘事項はなく、11月定例会の会議録は承認された。

4. 教育長の報告

教育長：明日で市内の幼稚園、小学校、中学校は終業式を迎えます。8月20日から始まりました2学期は19週ございました。その間、さまざまなことがありましたが、危惧しておりました学校園での新型コロナウイルスの集団感染というような事態は何とか避けることができたという状況でございます。

インフルエンザでございますが、すこやか教育推進課の担当者に聞きましたら、発熱で休む子どもさんはおられますが、インフルエンザの診断を受けた者は数名だそうです。学級閉鎖等はゼロでございます。これも当初予想はしていたのですが、マスクをするとか、手洗いを励行することが感染症対策において非常に大事なのだと改めて感じた次第でございます。

この2学期の間に、新型コロナウイルスに関しましては、PCR検査を受けたご家族の方、子どもさんもちろんおられましたし、市内の民間の放課後児童クラブ等で感染が確認されたというような時期もございました。医療従事者の方、老人の介護施設等で働いておられる方は、もちろん大変ですが、学校園の職員も非常に大変な中、頑張ってくれたというのが率直な思いでございます。特に就学前、園の場合は、1歳、2歳ぐらいの子どもさんは、密着、密接が当たり前です。これをなくして保育というのは成り立たないというような状況の中で、どの園の先生方も、もし自分が感染したことによっ

て子どもたちに感染させてしまったらという思いは、想像以上のものがあつたのではないかと思います。また、小学校、中学校の先生方にしても学級担任の先生方は、1日たりとも気を抜くことができない日々の連続だったのでないかと思います。

学校の給食は毎日が30人以上の密な状態での会食です。そういうことも考えると、本当に各校園の先生方には頭が下がる思いでございます。とはいえ、さらに厳しい状況のもとでの3学期もすぐに控えているということでございますので、年末年始は、先生方にもゆっくりお休みをとっていただいて、3学期に備えていただきたいと思います。

それから、2つ目でございますが、お手元に資料として1枚お配りしております。市内の中学校の校長先生が、ICT機器の活用について簡単に述べたものを添付させていただきました。このように、うまくいっている例もありますが、タブレットなどが全児童・生徒に行き渡ると、すごい教育効果のもとに従来とは全く違う教育改革が進むというような思いがどなたにもあるのも事実です。これを入れたからといって、すぐその日から教育改革が進むというようなものではございませんので、どんなふうに先生に使っていただいて学習効果を上げるか、これは試行錯誤の連続じゃないかという予想はしております。

委員の皆様にも年が明けましたら学校の授業の様子等も見ていただくとお思いますので、その際に、こういう機器を活用している授業をご覧になられましたら、またお気づきの点など聞かせていただいたらありがたいと思っております。

今年は新型コロナの影響で3カ月間休業があつた非常に特殊な年でありました。この3カ月の休業は一体どんな影響があつたかということをよく聞かれます。先ほども申しあげましたが、例えば小学校、中学校の先生方に見たら、新年度に入った2カ月間の遅れを取り戻さなくてはいけない、感染を未然に防ぐことにも神経を使わなくてはいけない、そして子どもたちの様子にも非常に気を使わなければいけないという中で、本当によくやっていたというのが私の率直な思いでございます。

また、2学期の間に思いましたのは、子どもたちの間でさまざまな意味で格差が大きく出てきた年だつたということです。自分で計画を立てて勉強したり、家の手伝いをしたりして生活できる子どもと、そういうことがなかなか難しい子ども、学力に関しても二極化ということはよく聞きますが、子どもの成長に関しても、まさにそういう点に注目していかなくてはならないと改めて思っているところでございます。

令和2年度は来年の3月まででございますが、この令和2年の定例会は今日が最後でございます。さまざまな点におきまして委員の皆様方のご支援やご助言等を賜りましたことに関しましてお礼申しあげまして、私からの報告

にかえさせていただきます。どうもありがとうございました。

5. 議案審議

議案第 44 号 第 3 期長浜市教育振興基本計画（案）について

教育長は事務局に説明を求め、教育総務課長から資料に基づき説明があった。
各委員とも異議なしということで、原案どおり同意された。

6. 協議・報告事項

(1) 令和 2 年長浜市議会 1 2 月定例会一般質問答弁要旨について

主な質疑応答は以下のとおり

西橋委員：先ほど教育長からの報告もございましたが、この 2 学期、当初は心配したのですが、無事乗り切っていただいたということが言えるのではないかと思います。それに対しては、教育委員会の事務局の皆さん方のご努力に感謝申しあげたいと思います。

この答弁書の全体を見てもとみると、就学前教育に対する質問、それからコロナに対する質問、ICT 教育に関する質問がほとんどを占めていたのではないかと思います。

私が 1 つ気になったのは、質問の中に「学級崩壊」という言葉が出てきたことで、これは本当に久しぶりではないかと思います。学級崩壊という言葉が議員が発せられた裏には何かあるのかというのがすごく気になりました。恐らく誰かが、自分の子どもが通っている学校でこういうことが起きたのだということに心配をなさって、議員に相談された結果、こういう質問が出てきたのではないかと思います。

私が現場にいた時は校内暴力というのが全国的に話題になりまして、そのとき学校にいた先生方は大変な思いをしたのですが、結局どうしておさまったかということ、かなり力で抑えた部分があったと私は思っています。力で抑えないわけにはいかなかった。そうでないと授業ができない。そういう時代がありました。その結果、この十数年、いわゆる校内暴力は下火になって、学級崩壊という言葉が使われなくなったのですが、現在は発達障害の対応で学校はかなりご苦労をいただいている。これは一つあると思うのです。それから不登校の生徒がやや増加しつつあるということがあります。

学級崩壊といいますか校内暴力を経験してきた先生が、現在、学校現場で不登校の生徒と向き合っている中で、暴力を振るう子どもの心と、不登校になっている子どもの心の底はどうも一緒ではないかということと言われる先生が何人かおられます。そこを一緒に考えないと、この不登校の問題もなかなかうまくいかないのではないかと。校内暴力は目の前で子どもが暴れ出しまするので、先生も殴られる、先生が口から血を出して職員室に逃げ込むとい

うようなことが日常茶飯事に行われていた学校に私はいました。

不登校の問題に関しては、そのような姿が見えないわけです。緊迫感が先生方の中に芽生えようがない。ところが、じっくり考えてみると、子どもたちの気持ちを教師も親も十分くみ取れなかったのが一つの大きな原因ではないかということをおっしゃる先生がいました。今後の不登校の生徒に対する指導、いろんな専門機関がかかわっていますが、学級担任としては、教育長の答弁されたことがどれぐらい先生の胸に響いて、その子どもの本当に望んでいることをくみ取れるかということに随分ご努力いただいていると思います。そういう視点をさらに大きくしていく必要があるのではないかと思います。

教育長：いろんな原因があるのだと思いますが、授業が成り立たないというのは、あまり先生の話聞いていない、授業中、許可を得ず立ち歩いたりするという状況です。教室を飛び出すとか、授業を妨害するとか、そこまでいってはおりません。そういう中で保護者の中でも心配する声があがったのですが、コロナ禍の中でございましたので、通常の年と同じように参観日があるわけではありません。ある保護者さんに聞きましたら、1学期の終わりの通信簿渡しや、8月の初めに初めて担任の先生の顔を見たというような状況です。担任の先生がどんな人かもわからない。学級の状況を見たのが2学期の後半ぐらいの参観日が初めてだったということで、変則的な年であったせいもあるのですが、そういうことに対してのご心配の質問だったと思います。

確実に校内暴力は小学校に移ってきているし、小学校の高学年ではなくて、中学年、低学年にこの波が押し寄せているというのは率直な思いでございます。

確かに発達上の課題を持った子どもさんもおられますし、いろんな原因があると思うのですが、これに対する具体的な対応策を考えるということは令和3年度の非常に大きな教育委員会の柱になっていくと思っております。もちろん、教師、学校の体制等の問題もありますし、子どもさんの状況による問題もあります。そういう意味から考えると、私は就学前にも、この問題は及んでくるだろうと思います。就学前の乳幼児期にどのような保育で、この子どもたちの可能性を小学校へつなげていくのか。本当の意味での幼小の連携が今後ますます必要になってくるだろうと思います。

中学校では、小学校に見られるような暴力事案というのは、私が現場にいたときから比べると本当に少ないです。中学校を見に行かれても、大丈夫かな、と思うような子は、外から見ている範囲ではそんなにはいないのではないかと思います。でも、内面に抱えている課題は改善されたわけではなくて、変化があったわけでもありませんので、いざ問題が起こると、社会的に大きな事案がいきなり出てくるというのものもあるでしょうし、もう一つは組織自体に背を向けざるを得ない子どもさんもおられるのも事実だと思います。

いずれにしましても、肝に銘じておかななくてはならないと痛感していますのは、不登校の子どもたちの数は増えているということです。これが前提だと私

は思っていますので、また令和3年度当初から新たな方策を導入していきたいと思っ

宮本委員：待機児童、保育の人材のことについて書いてあるのですが、待機児童の現状について聞きたいです。申請は秋頃にして、今実際どれぐらいの待機が出そうなのかという状況がわかれば教えてほしいです。今回、再就職をしたいお母さんたちのために、9月の時点で企業に内定を出してもらって、就職するのは4月から、園に申請を出して入れることになれば4月から働けるという取組をハローワークと一緒にしたのですが、企業もお母さんたちも本当に預けられるのかという心配をしておられます。

加点の制度がいろいろあると思うのですが、就労証明がもらえる内定が決まっている人と、実際働いた実績がある人とでは加点が違うので、決まっただけでは結局待機の中に入ってしまう、せっかく就職が決まったのにまた働けないことが起きるのではないかという不安が、お母さんたちにも支援している私たちにもあります。

結局保育園に入れないのであれば、9月の段階に内定を出すということは企業にも迷惑になってしまうので、今わかる範囲でいいので教えていただきたいです。

幼児課長：入所申し込みについては、現在も募集中でございまして、3月まで行うところでございます。3次募集までさせていただきます。細かな数字についてはまだ未確定でございまして、現状申しあげられるのは、令和2年度並みの30数名という待機があるのではないかという状況でございます。

あともう1点、入所についてわかりやすくするために点数化を去年から明らかにさせていただいたというところでございます。今後、どのあたりまで皆様にご納得いただけるような仕組みになるかというのは、今のところわかりませんが、協議をしていきたいと考えております。

教育長：12月議会の答弁に備えて、私も再度待機児童の勉強をしたのですが、難しいです。待機児童と簡単に言いますが、さまざまな縛りがあるわけです。幼児課の職員も、窓口に来られた保護者の方に、粘り強く対応していただいたおかげで、令和2年の4月当初の数よりも減少傾向にいくということだけは確実のようです。ただゼロになったわけではございませんので、減っていればいいというものではなくて、待機児童がゼロになるのを目標に置いて今後も粘り強くやっていきたいというところでございます。

廣田委員：昔、私が学校医をしていたときには、健康診断の時、とても落ちつかない、立ったり遊んだり隠れたり、そういう不安定な子どもさんがいました。

学校についていけない子には、病気のお子さんもいます。昔は学校で2階の廊下を自転車で走ったり、椅子を投げたり、そういう経験がありました。今、学級崩壊や登校拒否には、お子さんの病気が原因であることも中にはあるのではないかと思います。

教育長：小学校の例でいいますと、県教委と一緒に学校訪問した際に、危ないと思いました。なぜ危ないと思ったかという、確認ができていないのです。例えば、みんなで声を出して教科書を読む時に、読んでいるのが数人でした。それでもそれで終わってしまう。これはいかがなものかと。もちろんその先生も一生懸命やってもそうなるので無力感があつたのだと思いますが、子どもが何かしていても、結局それを見ているはずなのに、ちょっと置いておいて授業を進めてしまう。これは教師側の問題として非常に問題だと感じましたから、その学校の校長先生に、このまま放っておいたら学校が荒れてしまうと話をしました。

どうしたらいいかというのも、一概に全部に当てはまるわけではないですが、ある意味、先生も裸になって子どもと向き合っ、子どもの心の声も聞いて、自分の率直な思いも言って、1つずつやっていくしかないのかなと思いました。お父さん、お母さんにしてみたら、学校の先生はプロだから何とかしてくださいというのがあつたのでしょうか。先生、お任せするので、何とかいい方向に向けてやってくれというような関係までできれば、問題は半分以上解決に向かっているのだろうという気はします。

以前中学校がそういうような場であつたのは事実ですが、今は、先ほどのお話のように、小学校中学年から下にだんだん移つていっていると思います。それはただ単に家庭環境とか発達上の課題という問題でくくりにして片づけられることではないと思っています。

西橋委員：1つ、割とうまくいった例を挙げさせてもらつと、私がまだ現場にいたころですが、先生の指示に従えないとか、授業の邪魔をすとか、いろんなことをする子をいかに学級に取り入れていくのか。大事なのはこの子の保護者です。保護者と学級担任がまず仲良くなれないといけません。これが第一原則です。そこが途切れている限りは何をやってもだめです。

そのために、担任の先生をサポートする2～3人のチームを作ります。学級を持っていない先生も含めてチームを作つて、定例的に学級担任と、そのチームと、保護者が話し合いの場を持つ。そこへいろんな専門の先生にも入つていただくと、最後は学校の思いをわかってくれる場面が出てくるし、保護者の本当の思いも学級担任に伝わる場合があるし、そういう中で子どもがうまく育つていった例があります。そういうことも校内体制としてとつていただくのも大事なことではないかと思つます。

美濃部委員：朝子どもたちの送り迎えをしているのですが、この間雪が降りましたね。大した雪ではなかつたです。すると、今日はみんな車で学校へ登校させるので、送りに来てもらわなくてもよいと連絡が来ました。私たちの時代では考えられなかつたことです。雪だから冷たいのかかわいそうというようなこともあるのか、子どもも送つてと言うのか。本当にこの数年間で子どもの常識も、それから保護者の常識も随分変わつてしまつたというのは実感しました。

それから、私は学生を先生として送り出す側の仕事をしています。今年度、新任で就職したある県のある学校の先生のことですが、春先、就職してちゃんとやっているかなというのが心配でいろいろ聞いていたら、学校は楽しいですということでした。その学校は子どもが10人くらいの小規模な単級の田舎の学校です。いいところへ行ったなと言っていたのですが、つい先日聞いたら、子どもが言うことを聞いてくれないから大変だということでした。この学校でこんなことだったら、どこの学校でも間に合わないのではないかというようなことを言っていました。時代の動きの中で、子どもも親も、そして先生になっていく世代の子ども、どんどん新しい教育に順応していかないといけないというところで、みんなが弱っているのだろうなということを改めて感じたところです。

でも、教育長が答弁されているようなことはとても大事なことで、それから西橋委員がおっしゃった、いつの時代でも「関係」ですよ。昨日も一人こんなことを言ってきました。今、学生ボランティアで学校に行っている子なのですが、自分の住んでいる近くの母校へ行っています。オートバイに乗って通勤していました。知っている子どもも多いので、まとわりついてくる。危ないのだから離れておけと言うのですが、追いかけてきたりするようなことがあったようです。すると地域の人から、おたくの学校の先生が、子どもとオートバイで鬼ごっこして遊んでいるという通報が来たというのです。

これから先生になっていくのに気をつけないといけないよと言うことしか言えなかったのですが、ひょっとすると、それこそ関係を持って、だめな事はだめと毅然とした態度で指導できるとよかったかもしれません。そういうことが苦手なのが今の若い世代なのかなと思いました。

だから、毅然ときちんと指導する。関係を持つ。それから、何よりも子どもたちは学校では授業の時間が一番多いのですから、先生の授業を受けて、楽しい、おもしろいと感じる、そういう授業を心がけるということがまず一番大事だということを、今は学生にも言っています。授業の方法が変わっていくこういう時代に本当に難しいことですが、先輩の先生方、教育委員会の指導してくださる先生も、そういうところに重点をかけながら臨んでいただくことが大事なのだろうということを思っております。

教育長：小学校は教諭の平均年齢が40歳を切っています。経験10年未満で学年主任の先生もいます。我々も十分気をつけて見ていかないといけないと思うのは、そういう厳しい人間関係を、どちらかという敬遠する傾向があります。今は褒めれば子どもが伸びるという世の中の流れです。でも、褒めるということと認めるということをしっかり区分けして考えないといけないと思います。子どもは賢いのですから、褒められもしないところを褒めてもらっても、何のありがたみもない。あと、小学校では朝から帰るまで1人の先生が見ているので、問題を抱え込んでしまうと、案外周りの先生が見えにくいと思います。単級の

学校とか1学年2クラスみたいな学校であれば、まだ管理職の先生が見たりする機会も多いのですが、大規模な学校になると、表に出たころには結構大変な状況だったということがあります。

中村委員：11ページの学級崩壊のことなのですが、学級崩壊というのは先生と子どもに対してだけなのでしょうか。子ども同士の間でもいじめとかいろんなことがあって、クラスがまとまらないということもあるのではないかと思います。また、子どもが一人で長時間留守番をしているということが書いてあるのですが、そういうことも何か関係するのではないかと思います。

教育長：私が現場で学級担任とか学年主任をしていたときに、学級内で嫌なことを言われたことがありますかといったいじめの調査をしましたが、これをして、その後をしっかりとやらないと、かえって子どもはおまえを信用しないようになるぞとよく先輩から言われました。これに書くということは、「先生、何とかして」という思いがあるから書いてくるのだ。これに対して書かれたおまえが、軽い感じで見えていたら、あの先生に言っても駄目だとなってしまふぞ。ということ言われた覚えがあります。おっしゃるように、学級での規律やそういうものを先生が制御できなくなったら、当然、子ども間のいじめとか、嫌がらせとか、そういったことが、比例して起こってくるというような状況です。

西橋委員：中村委員がおっしゃった子ども同士とか、子どもと先生とかいう原因ですが、もちろんいろんなケースがあるので一概に言えませんが、もう一つ、私が経験してきた中では、子ども同士のけんかをずっと調べていくと、子どもたちの親同士が、徹底的に仲が悪いというケースもありました。

廣田委員：私の妹も学校の先生です。一番困ることは、モンスターペアレンツだそうですね。親の問題も、結構ありますね。

西橋委員：定期的に毎週何曜日に話し合いを持ちましょう、というところへ行くまでが大変です。なかなか親がうんと言ってくれない。親がそれに応じてくれるようになったら、話し合いが毎週持てるようになり、だんだん本音がわかってきます。

廣田委員：教師と親の気持ちが一致しないとだめですね。昔は学校の先生が成績の悪い子にする暴力もありました。この子どもが家に帰ったら、また親に怒られます。そういう時代もありました。先生と親の協力がなかったら教育は難しいですね。

教育長：今は教育委員会も着目して、定期的というわけではないですが、ケースに応じて、チームをつくって対応しているところです。よく子どもの自己肯定感とか自尊感情を高めればと言いますが、親の自己肯定感や自尊感情を高めなければ、子どもはなかなか変わらない、変われないということもあります。それをペアレントトレーニングと言うらしいのですが、そのような研究を既に先進的な大学では本格的にやっておられます。西橋委員がおっしゃったように、親との関係づくりという面からのアプローチが有効な例もあるだろうし、虐待

でも、心理的な虐待をしている保護者は大体虐待の認識がありません。なぜか
というと、第三者から見たら虐待であっても、私も子どものときそうだったか
らという感覚です。こういうお父さん、お母さん、特にお母さんの考え方を変
えてもらうというのは、ある意味、専門家の力を借りる部分も必要かと思いま
す。

7. その他

8. 閉会

教育長から閉会宣言があった。